

和尚さんと小僧

楠山正雄

青空文庫

大そうけちんぼな和尚さんがありました。何かよそからもらっても、いつでも自分一人だけでばかり食べて、小僧には一つもくれませんでした。小僧はそれをくやしがつて、いつかすきを見つけて、和尚さんから、おいしいものを召し上げてやろうと考えていました。ある日和尚さんは檀家から、大そうおいしいあめをもらいました。和尚さんはそのあめをつぼの中に入れて、そつと仏壇の下にかくして、ないしよで独りでなめていました。

ところがある日、和尚さんは、用事があつて外へ出て行きました。出て行きがけに、和尚さんは小僧にいいつけて、

「この仏壇の下のつぼには、だいじなものが入っている。見かけはあめのようだけれど、ほんとうは、一口でもなめたら、ころりとまいってしまうひどい毒薬だ。命が惜しいと思つたら、けつしてなめてはならないぞ。」

といい置いて、出て行きました。

和尚さんが出てしまうと、小僧はさつそくつぼを引きずり出して、残らずあめをなめてしまいました。それから和尚さんの大切にしている茶わんを、わざと真つ二つに割つて、自分は布団をかぶつて、うんうんうなりながら、いまにも死にかけているようふりをしていました。

夕方になつて、和尚さんが帰つて来てみますと、中は真つ暗で、明りもついていませんでした。和尚さんはおこつて、

「こらこら、小僧、何をしている。」

とどなりました。すると小僧は布団の中から、虫の鳴くような声を出して、

「和尚さん、ごめん下さい。わたしは死にます。もうとても助かりません。死んだあと、かわいそうだと思つて、お経の一つも読んで下さい。」

といました。

和尚さんは、だしぬけに妙なことをいわれて、びっくりしました。

「小僧、小僧、いったいどうしたのだ。」

「きよう、和尚さんのたいじなお湯飲みを洗つていますと、いきなり猫がじゃれかかつて来て、そのひょうしに手をすべらして、お湯飲みを落としてこわしてしまいました。も

うこれは死んで申しわけをするよりほかはないと思つて、つぼの中の毒薬を出して、残らず食べました。もう毒が体中に回つて、間もなく死ぬでしょう。どうかかんにんして、お経だけ読んでやつて下さい。ああ、苦しい、ああ、苦しい。」

といいながら、おいおい、おいおい、泣きました。

二

ある日、和尚さんは、御法事に呼ばれて行つて、小僧が一人でお留守番をしていました。お経を読みながら、うとうと居眠りをしていますと、玄関で、

「ごめん下さい。」

と人の呼ぶ声がしました。小僧があわてて、目をこすりこすり、行つてみますと、お隣のおばあさんが、大きなふろしき包みを持って来て、

「おひがんでございますから、どうぞこれを和尚さんに上げて下さい。」

といつて、置いて行きました。小僧はふろしき包みを持ち上げてみますと、中から温かそうな湯気が立つて、ぷんとおいしそうな匂いがしました。小僧は、

「ははあ、おひがんでお団子だんごをこしらえて持って来たのだな。これを和尚おしょうさんにこのまま渡わたしてしまえば、どうせけちんぼで欲よくばりの和尚おしょうさんのことだから、みんな自分じぶんで食べたてしまつて、一つもくれないにきまつている。よしよし、ちようどいい、ねむけざましに食たべてやれ。」

と、こう独ひとり言ことをいいながら、ふろしき包つつみをほどくと、大きなお重じゅうばこ箱こにいっぱい、おいしそうなお団子だんごがまつていました。小僧こぞうはにこにこしながら、お団子だんごをほおぼつて、もう一つ、もう一つと、食たべるうちに、とうとうお重じゅうばこ箱こにいっぱいのお団子だんごを、きれいに食たべてしまいました。食たべてしまつて、小僧こぞうははじめて気きがついたように、

「ああ、しまつた。和尚おしょうさんが帰かえつて来たらどうしよう。」

と、困こまつてべそをかきました。するうち、ふと何か思おもいついたとみえて、いきなりお重じゅうばこ箱こをかかえて、本堂ほんどうへ駆かけ出だして行いきました。そして御本尊ごほんぞんの阿弥陀あみださまのお口くちのまわりに、重じゅうばこ箱このふちにたまつたあんこを、指ゆびでかきよせては、こてこてとぬりつけました。そして重じゅうばこ箱こを阿弥陀あみださまの前まえに置おいて、部屋へやに帰かえつて来て、知らん顔かおをしてお経きやうを讀よんでいました。

しばらくすると、和尚おしょうさんは帰かえつて来て、小僧こぞうに、

「留守にだれも来なかつたか。」

とたずねました。

「お隣のおぼあさんが、お重箱を持って来ました。おひがんだから和尚さんに上げて下さいといいました。」

と、小僧は答えました。

「その重箱はどこにある。」

「本堂の御本尊さまの前に上げて置きました。」

「うん、それはなかなか気が利いている。どれ、どれ。」

といいながら、和尚さんは本堂へ行ってみますと、なるほど重箱がうやうやしく、御本尊の前に上がっていました。あけてみると、中はきれいにからなっていました。

「これこれ、小僧。きさまが食べたのだな。」

と、和尚さんは大きな声でどなりつけました。すると小僧はすまして、のこのこやつて来て、

「へええ、とんでもない、そんなことがあるものですか。」

といいながら、そこらをきよるきよる見まわして、

「ああ、わかりました。御本尊の金仏さまが上がったのです。ほら、あのとおりの口のはたに、あんこがいつぱいつぱいしています。」

と、こういって、和尚さんはそれを見て、

「なるほどあんこがついている。お行儀のわるい金仏さまもあればあったものだ。」
といいながら、おこつて手に持っていた拵子で、金仏さまの頭を一つくらわせました。
すると「くわん、くわん。」と金仏さまは鳴りました。

「なに、くわんことがあるものか。」

と、またおこつて二度つづけざまにたたきますと、また「くわん、くわん。」と鳴りました。

そこで和尚さんは、また小僧の方を振り返ってみて、

「それ見ろ、金仏さまはいくらたたいても、くわん、くわんというぞ。やはりきさまが食べたにちがいない。」

すると小僧は困った顔をして、

「たたいたぐらいでは白状しませんよ。釜うでにしておやんなさい。」

といました。そこで大きなお釜かまにいっぱいお湯ゆを沸わかして、金かな仏ぶつさまをほうり込みこました。すると間まもなく、お湯ゆがぐらぐらにたぎつてきて、

「くつた、くつた、くつた。」

といました。

「そらぐらんなさい、和尚おしょうさん。とうとう白はくじょう状じょうしましたよ。」

と、小僧こぞうさんはとくいらしくいきました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

和尚さんと小僧

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>